短期大学生における英語基礎力の動向

中島　直樹

1．はじめに

平成 25 年 4 月，城西短期大学において英語力調査が実施され，外国人留学生を除く 51 名の短期大学ビジネス総合学科新入生が受験した。近年，短大を取り巻く環境が大きく変化し，それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。短大入学生の英語力低下の傾向は年々顕著になり，特に優秀な学生の入学も以前に比べると少なくなった。それに加えて，ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため，実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかをあらかじめ認識しておくことがより必要になった。このような観点から，新入生全員に対して毎年英語力調査を実施しており，その調査結果を基に，坂戸キャンパスの一年次の必修科目である TOEIC イングリッシュⅠA・ⅠB（TOEIC のリスニングに重点を置いた演習）と TOEIC イングリッシュⅠC・ⅠD（TOEIC のリーディングに重点を置いた演習）を能力別のクラス編成にし，これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図っている。

本論は，本年度学生の英語力調査の結果を，昨年度あるいはそれ以前の学生のそれと比較することにより，本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということを検討すると共に，一年後の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施して，どれだけスコアが伸びたかを調査し，本学学生の英語力の特徴を明らかにしようとする試みである。それに加えて，12 月に本学で実施された TOEIC テストのスコアも比較・検討し，今年度新入生の英語力の新しい傾向を分析していきたい。

2．過去 11 年間の英語力調査の結果を振り返って

はじめに，平成 14 年度の英語力調査から振り返ってみたい。出題形式は全問マークシート方式，試験時間は 1 時間，全 50 問で 100 点満点の試験であった。93 名が受験し，全体の平均点は約 56.9 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 1 の通りである。

表 1　平成 14 年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平均点
経営情報実務	67 名	約 57.8 点
現 代 文 化	26 名	約 54.7 点
全　　体	93 名	約 56.9 点

実際の得点分布を見てみると，かなり大きな広がりを持っていたことが分かる。90 点以上のかなり基礎力のある学生が 6 名，次いで 75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生が 10 名，29 点以下のほとんど基礎力のない学生が 7 名おり，その中間に 30 点から 74 点までの中間層があった。しかし，よく見るとその中間層の中にもいくつかの山があった。60 点から 74 点までの上位の層（26 名）と 45 点から 59 点までの中位の層（24 名）と 30 点から 44 点までの下位の層（20 名）とにおおよそ分類でき，この 3 つの層が平成 14 年度の女子短期大学部新入生に占める割合は実に 75 パーセントを超えていた。

次に，平成 15 年度の結果について見てみたい。59 名の新入生全員が受験し，全体の平均点は約 54.5 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 2 の通りである。

表 2　平成 15 年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平均点
経営情報実務	47 名	約 55.0 点
現 代 文 化	12 名	約 52.6 点
全　　体	59 名	約 54.5 点

平成 14 年度の英語力調査の平均点と比較すると，経営情報実務学科においては 2.8 点，現代文化学科においては 2.1 点，全体では 2.4 点下がった。また，この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高い結果となった。

得点分布グラフの形にもある程度の変化が見られた。14 年度と違う点は，90 点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった（14 年度は 6 名）ことと，中間層の領域の形が逆転したことであった。30 点から 74 点までの中間層にはいくつかの山があることが 14 年度の英語力調査の検証で分かっていた。そして，14 年度は 60 点から 74 点までの上位の層に 26 名，45 点から 59 点までの中位の層に 24 名，30 点から 44 点までの下位の層に 20 名の学生がいて，得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが，平成 15 年度は上位の層に 16 名，中位の層に 17 名，下位の層に 17 名と，中間よりやや下に比重が移っていた。

次に，平成 16 年度の結果について検討したい。43 名の新入生が受験し，全体の平均点は約

50.5 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 3 の通りである。

表 3　平成 16 年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平均点
経営情報実務	33 名	約 50.5 点
現 代 文 化	10 名	約 50.4 点
全　　体	43 名	約 50.5 点

平成 15 年度の平均点と比較すると，経営情報実務学科においては 4.5 点，現代文化学科においては 2.2 点，全体では 4.0 点下がった。平成 14 年度から年々下降の一途をたどっていて，短大に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下していることを如実に示す結果となっていた。

全体の得点分布は基本的には 15 年度とそれほど変わっておらず，15 年度をほぼ継承していた。90 点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなったことも，中間層の形が逆転したことも 15 年度と同様であった。それに加えて，75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生が 5 名となり，前年より 3 名減少してしまった。中間層の中を詳しく見てみると，60 点から 74 点までの上位の層に 9 名，45 点から 59 点までの中位の層に 13 名，30 点から 44 点までの下位の層に 13 名の学生がいた。平成 14 年度には，得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが，平成 15 年度から中下位に比重が移り，その傾向は平成 16 年度も続いていた。

次に，平成 17 年度の結果について検討したい。80 名が受験し，全体の平均点は約 56.5 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 4 の通りである。

表 4　平成 17 年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平均点
経営情報実務	57 名	約 56.9 点
現 代 文 化	23 名	約 55.5 点
全　　体	80 名	約 56.5 点

前年度の平均点と比較すると，経営情報実務学科においては 6.4 点，現代文化学科においては 5.1 点，短大全体では 6.0 点上昇した。平成 12 年度から短大入学生の英語力調査のデータを採っているが，前の年の平均点を上回ったのは初めてのことであった。数値的に見て，平成 14 年度の水準まで上昇した結果となった。全体の得点分布を見ても，短大全体では 6.0 点も平均点が上昇したので，まったく異なった形になった。90 点以上のかなり基礎力のある学生はひとりもいなかったが，75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生が 19 名おり，この層が本学を引っ

張る牽引車的存在になっていた。受験者数が 80 名なので，約 4 人に 1 人がここに属していたことになり，この年度の躍進を支えた原動力のひとつになっていた。29 点以下のほとんど基礎力のない学生が 6 名いたが，この割合は 16 年度とほぼ同じであった。30 点から 74 点までの中間層は 55 名であった。この中間層の中を詳しく見てみると，60 点から 74 点までの上位の層に 18 名，45 点から 59 点までの中位の層に 16 名，30 点から 44 点までの下位の層に 21 名の学生がいた。16 年度は，得点層が下位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが，17 年度はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。平成 15 年度から中下位に比重が移ってきていて，平均点を下げる最大の理由となっていたが，17 年度になってようやくその流れが変わった。

次に，平成 18 年度の結果について検討したい。82 名が受験し，全体の平均点は約 48.3 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 5 である。

表 5　平成 18 年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平均点
ビジネス総合	82 名	約 48.3 点

この年度に経営情報実務学科と現代文化学科が統合されてビジネス総合学科が誕生した。新学科になって初めての英語力調査であったが，17 年度の平均点約 56.5 点から 8.2 点下落の約 48.3 点となった。17 年度にいったん上昇に転じたが，18 年度にまた大きく下げた。上昇の流れがわずか一年で途絶えてしまった。

全体の得点分布を見てみると，受験者数は前年とほぼ同数であったにもかかわらず，グラフの形は前年とまったく違うものになっていた。前年はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。基礎力のない学生もいたが，基礎力のある学生もほぼ同数いた。特に，前年は 75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生が 19 名もいて，この層が本学の全体的な底上げの役目を果たしていたが，18 年度はその層には 6 名しかいなかった。ピークは 40 ～ 44 点のところにあり，16 名が集中していた。29 点以下のほとんど基礎力のない学生が 9 名いたが，この層に関しては，前年の 6 名と大差がなかったと考えてよいであろう。90 点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなかったことも前年と同様である。中間層の上位の層には 15 名おり，前年の 18 名とほとんど変わりはなかった。しかし，中位の層は前年の 16 名から 7 名増の 23 名，下位の層は 21 名から 8 名増の 29 名となっており，中間層の中でもとりわけ中下位の増加が目についた。つまり，75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生の層が減少した分がここに集まっていたのである。前年度は奨学金制度が充実していた年度でもあり，高校の評定平均値 3.5 以上の学生が多く入学し，ある程度基礎力のある学生の層の中核となっていたが，18 年度はその層が激減し，代わりに中間層の中下位の学生が増えた。これが平均点を 8.2 点下げた最大の原因であった。

次に，平成 19 年度の結果について検討したい。受験者数 69 名，全体の平均点は約 51.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 6 である。

表 6　平成 19 年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69 名	約 51.0 点

ビジネス総合学科になって 2 回目の英語力調査であったが，前年度の平均点約 48.3 点から 2.7 点上昇の約 51.0 点となった。前年度と比べ，平均点が若干上昇したため得点分布グラフの形にわずかな変化が見られたが，特に大きな変化ではなかった。得点のより低い層により多くの学生が集中するというそれまでの傾向を継承していたと言ってよいであろう。30 点から 74 点までの中間層を見てみると，60 点から 74 点までの上位の層に 12 人，45 点から 59 点までを中位の層に 18 人，30 点から 44 点までを下位の層に 22 人となっており，やはり基礎力のない学生の多さが目立った。75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生の層は，前年の 6 名から 11 名に増加していた。ピークは 18 年度は 40 ～ 44 点のところにあったが，19 年度は 50 ～ 54 点に移動しており，これらが 19 年度の英語力調査の明るい材料であった。

次に，平成 20 年度の結果について検討したい。受験者数 81 名，全体の平均点は約 51.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 7 である。

表 7　平成 20 年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81 名	約 51.0 点

受験者数は 12 名増加，平均点は前年とほぼ同じであった。だが，前年度と比べ，得点分布グラフの形はわずかに異なっていた。ピークは 50 ～ 54 点と 40 ～ 44 点のところにあり，いずれも 10 名。30 点から 74 点までの中間層を見てみると，60 点から 74 点までの上位の層に 15 人，45 点から 59 点までを中位の層に 23 人，30 点から 44 点までを下位の層に 22 人となっており，中位の層が下位の層を 1 名ではあるが上回った。得点のより低い層により多くの学生が集中しやすい傾向は変わっていなかったが，中位の層が増加したことはよい材料であった。85 ～ 89 点の層に 5 名，90 点以上のかなり基礎力のある学生が 2 名いたことも喜ばしいことであったが，29 点以下のほとんど基礎力のない学生が 11 名（前年は 6 名）おり，平均点が上がらない原因になっていた。かなりできる学生もいたが，それと同数のまったくできない学生もいて，平均すると前年並みであった。

次に，平成 21 年度の結果について検討したい。受験者数 69 名，全体の平均点は約 46.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 8 である。

表 8　平成 21 年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69 名	約 46.0 点

受験者数は 12 名減少，平均点は前年と比べ 5 点マイナスであった。得点分布グラフの形も当然異なっていた。前年度のピークは 50 ～ 54 点と 40 ～ 44 点のところ（いずれも 10 名）にあったが，21 年度は 30 ～ 34 点のところに下がってきており，12 名の学生がここにいた。また，第 2 のピークもその前後の 40 ～ 44 点と 20 ～ 24 点にあり，低得点層の膨らみが目立った。30 点から 74 点までの中間層を見てみると，60 点から 74 点までの上位の層に 14 名，45 点から 59 点までの中位の層に 14 名，30 点から 44 点までの下位の層に 24 名となっており，やはり下位の層の占める割合がかなり多かった。29 点以下のほとんど基礎力のない学生も 12 名おり，前年と同様に，この層が平均点を大きく押し下げていた。90 点以上のかなり基礎力のある学生が 2 名（内 1 名は留学経験者）いたことが唯一の明るい材料であった。

次に，平成 22 年度の結果について検討したい。受験者数 81 名，全体の平均点は約 53.5 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 9 である。

表 9　平成 22 年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81 名	約 53.5 点

受験者数は 12 名増加，平均点は前年と比べ 7.5 点上昇であった。前年と比べて平均点が大きく上昇した年は過去には平成 17 年度のみであったので，これが二度目ということになる。7.5 点の上昇は 17 年度の 6.0 点を上回っていた。平成 17 年度は奨学金制度が充実し，多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。しかし 22 年度は 17 年度のような奨学金制度はなかったが，大きく平均点が上昇した。その原動力となったのが 3 月の入試で入学した学生達であった。彼らのほとんどが城西大学やその他 4 年制大学の受験に失敗し，第二希望で短大に入学した。一度は受験勉強をやった実績と短大卒業後に編入したいという気持ちを持ち合わせた彼らが平均点を押し上げたのだと思う。これまでの短大入学生はいわゆる受験というものを経験しないで入学することが多かった。そのような状況の中で，22 年度は受験に失敗した者たちが新しい風を吹かせてくれた。グラフの形を見てみると，前年度のピークは 30 ～ 34 点のところにあり，12 名の学生

がそこにいた。また，第 2 のピークもその前後の 40 ～ 44 点と 20 ～ 24 点にあり，低得点層の膨らみが目立っていた。それに対して，22 年度のピークは 50 ～ 54 点と 40 ～ 44 点のところに上がってきていて，10 名の学生がここにいた。第 2 のピークは下方 30 ～ 34 点のところ（前年度のピーク）に 9 名いたが，70 ～ 74 点に 7 名，60 ～ 64 点に 6 名，両ピーク間の 45 ～ 49 点に 6 名おり，前年の下膨れした形とは明らかに異なっていた。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は前年の 12 名から 8 名に減っていた。90 点以上のかなり基礎力のある学生は 4 名おり，前年より 2 名増えていた。

次に，平成 23 年度の結果について見てみたい。57 名が受験し，全体の平均点は約 43.7 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 10 である。

表 10　平成 23 年度英語力調査結果

学　科	受験者数	平均点
ビジネス総合	57 名	約 43.7 点

受験者数は 24 名減少，平均点は前年と比べ 9.8 点下落であった。受験者数は大幅減，平均点も調査を始めて以来過去最低，下げ幅も過去最大であった。前年に 7.5 点と大幅上昇し，23 年度が注目されたが，このような残念な結果であった。過去に平均点が前年より大きく上昇した年度は 17 年度と 22 年度の二度であったが，いずれも翌年には大きく平均点を下げていた。特に 23 年度の下げ幅は大きく，18 年度の 8.2 点下落を上回っていた。平成 17 年度は，奨学金制度が充実していた年度であり，多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。また 22 年度は，4 年制大学の受験に失敗して短大第二希望で入学した学生たちが，短大卒業後に 4 年制大学に編入したいと強く思い，また受験勉強をした経験を活かして平均点を押し上げた。このように考えてみると，17 年度と 22 年度の 2 年だけが例外なのであって，短大入学者の英語基礎力は年々著しく下がっていると言わざるをえない。

得点分布グラフを見てみると，前年度のピークは 50 ～ 54 点と 40 ～ 44 点のところにあり，10 名の学生がここにいた。第 2 のピークは下方 30 ～ 34 点のところに 9 名いたが，70 ～ 74 点に 7 名，60 ～ 64 点に 6 名，両ピーク間の 45 ～ 49 点に 6 名おり，それ以前の下膨れした形とは明らかに異なっていた。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は 8 名，90 点以上のかなり基礎力のある学生は 4 名であった。それに対して，平成 23 年度のピークは 40 ～ 44 点のところにあり，12 名の学生がここにいた。第 2 のピークは 50 ～ 54 点のところに 8 名いたが，1 名少ない 7 名の学生が 20 ～ 24 点のところにいて第 3 のピークを形成していた。90 点以上のかなり基礎力のある学生はいなくなり，最高点は 86 点，次点は 78 点であった。グラフの形も以前の下膨れした形にもどってしまった。39 点以下の学生が 20 名もおり，それが全体の 35 パーセント以上を占

めるという散々な結果であった。

次に，平成 24 年度（昨年度）の結果について見てみたい。54 名が受験し，全体の平均点は約 44.9 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 11 である。

表 11　平成 24 年度英語力調査結果

学　科	受験者数	平均点
ビジネス総合	54 名	約 44.9 点

受験者数は 3 名減少，平均点は前年と比べ 1.2 点の上昇であった。前年の英語力調査で過去最低を記録し，昨年度の結果が注目されたが，受験者数も平均点も前年とほぼ同じ結果となった。依然として短大始まって以来の過去最低水準であった。平均点が 45 点を下回った年は 23 年と 24 年の 2 年だけであり，いかに昨年の短大 1 ・ 2 年生に基礎学力が不足していたのかがよく分かる。得点分布グラフの形を見てみると，前年度と同様ピークは 40 ～ 44 点のところにあり，12 名の学生がここにいた。30 ～ 34 点に 8 名，50 ～ 54 点に 7 名おり，これらが第 2 のピークを形成していた。第 3 のピークは 65 ～ 69 点と 20 ～ 24 点にあり，それぞれ 6 名の学生がいた。最高点は 92 点，次点は 88 点であり，その次はずっと下って 74 点であった。平成 14 年以来，30 点から 74 点までの層を中間層としてきたが，昨年はその中間層以下が 54 名中 52 名を占め，かつてはある程度存在していたそれ以上の層がほぼ消滅してしまった。中間層の中を詳しく見てみると，60 点から 74 点までの上位の層に 9 名，45 点から 59 点までの中位の層に 13 名，30 点から 44 点までの下位の層に 21 名となっていて，やはり下位の層ほど人数が多くなっている。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は 9 名，90 点以上のかなり基礎力のある学生は 1 名であった。

3．今年度の結果について

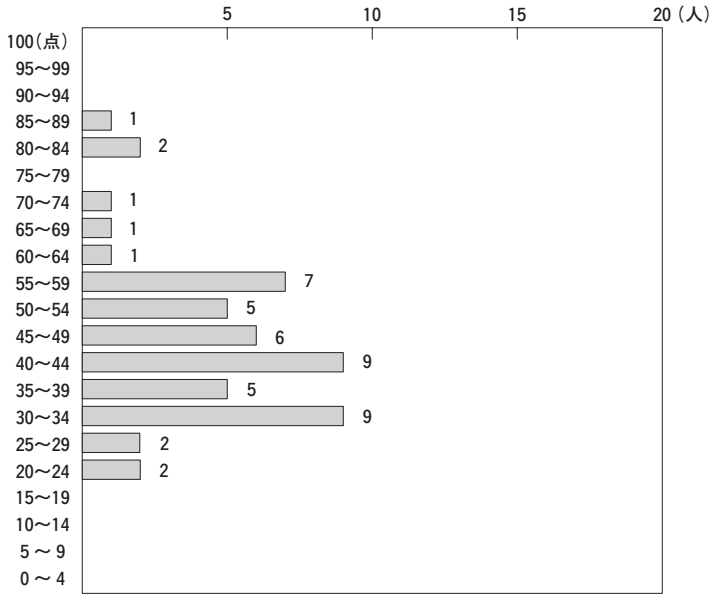
今年度もこれまでと同様に，出題形式は全問マークシート方式，試験時間は 1 時間，全 50 問で 100 点満点の試験とした。外国人留学生を除く 51 名が受験し，全体の平均点は約 45.8 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 12 である。

表 12　平成 25 年度英語力調査結果（4 月実施）

学　科	受験者数	平均点
ビジネス総合	51 名	約 45.8 点

受験者数は 3 名減少，平均点は昨年と比べ 1.2 点の上昇であった。前回，前々回と過去 2 年続けて最低レベルに留まり，今回が注目されたが，受験者数も平均点も昨年とほぼ同じ結果となった。これで 3 年連続 45 点前後というかつて経験したことのないほどの低い結果となってしまった。毎年，TOEIC のスコアアップを目指して授業を行っているが，今後もこのような状況が続けば，もはや TOEIC 云々のレベルではなくなると思う。得点分布グラフの形は以下の様になっている。

平成 25 年度英語力調査結果得点分布グラフ（ 4 月実施）



グラフの形を見てみると，ピークは 40 ～ 44 点と 30 ～ 34 点のところにあり，それぞれ 9 名の学生がここにいる。第 2 のピークは 55 ～ 59 点にあり， 7 名の学生がいる。次いで，45 ～ 49 点のところに 6 名，50 ～ 54 点と 35 ～ 39 点のところにそれぞれ 5 名となっている。30 点から 74 点までの中間層を見てみると，60 点から 74 点までの上位の層が激減してわずか 3 名，45 点から 59 点までの中位の層に 18 名，30 点から 44 点までの下位の層に 23 名となっていて，今年度は特に中下位の比重が大きい。中間層以下が 51 名中 48 名を占め，かつてはある程度存在していたそれ以上の層がほぼ消滅してしまったのは昨年と同じである。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は 4 名（昨年は 9 名）に減っているが，中間層上位の層も減っていることで相殺され，昨年と同程度の平均点となっている。中間層中下位に特に多くの学生が集中しているという今年度の傾向がよく見てとれる。残念ながら 90 点以上のかなり基礎力のある学生はひとりもいない。最高点は 88 点，次いで 82 点，80 点，70 点と続いている。

4．　問題の検証

次に，実際に出題された問題を検討し，正解率の高かった問題や低かった問題等について特に気づいた点を検証していきたい。

まず，最も正解率の高かった問題は 10 番であり，正解率は 80.3%であった。

(10)　A：I don't know (　　) Central Park is.

B：It's not far. I'll show you.

1. who　　2. when　　3. where　　4. whose

次に正解率の高かった問題は 37 番であり，正解率は 78.4%であった。

(37)　A：I'm sorry to be late. The bus didn't come on time this morning.

B：(　　)

1. This afternoon.　　2. Don't worry.

3. Yes, you can.　　4. No, I didn't.

次に正解率の高かった問題は 5 番であり，正解率は 74.5%であった。

(5)　Laura speaks French very well. (　　) fact, she lived in France for three years.

1. Of　　2. For　　3. By　　4. In

次に正解率の高かった問題は 42 番であり，正解率は 72.5%であった。

(42)　どこでそんなに素敵なコートを見つけたのですか。

Where (① a ② you ③ did ④ such ⑤ find ⑥ nice) coat?

1. _⑥_⑤__　　2. _①_④__　　3. _②_④__　　4. _③_⑤__

中学校で習う疑問文の基本的な形であるが，最低限の基礎力を問うために出題した。

次に正解率の高かった問題は 45 番であり，正解率は 70.5%であった。

(45)　どの列車がボストン行きか教えていただけませんか。

Could you (① goes ② train ③ to ④ me ⑤ which ⑥ tell) Boston, please?

1. _④_②__　　2. _③_⑥__　　3. _①_③__　　4. _⑥_②__

これも基本的な文法ではあるが，なぜかよくできていた。この問題がベスト 5 に入ってきたのは初めてである。

正解率が 70%を越えたのは以上の 5 題であった。

反対に，最も正解率の低かった問題は 18 番であった。

(18)　If it (　　) tomorrow, I'll probably stay home and read.

1. rainy　　2. rains　　3. raining　　4. to rain

正解率は 17.6%であった。半数以上が 1 を選んでいた。be 動詞がないのに主語 it の後ろに直接

形容詞をつなげたり，ing 形を続けたりする基礎力不足が目立つのは毎年同じ傾向である。

次に正解率の低かった問題は 7 番と 36 番であり，21.5%であった。

（7）　A：Here's your birthday cake, Jenny. You wanted a chocolate cake,(　　) you?

B：Oh, yes, Mom. It looks delicious!

1. aren't　　2. didn't　　3. don't　　4. weren't

(36)　A：Can you visit our farm in Canada this summer, Ken?

B：(　　)

1. Yes, it's mine.　　2. No, I haven't.

3. No. There's a farm.　　4. Sure. I'd love to.

7 番については解答が 1 から 4 まで均等に分かれており，付加疑問文についての理解が不足しているのが分かる。36 番については，4 割以上が 3 を選んでいた。この 2 題がワースト 3 に入るのも初めてである。

次に正解率の低かった問題は 34 番であった。

(34)　It's a very busy airport. The planes arrive (　　) after another.

1. another　　2. one　　3. many　　4. fast

基本的なイディオムを問うために出題したが，正解率は 23.5%と低かった。3 を選んだ学生は 43.1%，4 は 29.4%となっていた。

正解率が 25%以下の問題は以上の 4 題であった。

1 番から 35 番までは基本的な文法・語法，36 番から 40 番までは会話，41 番から 50 番までは日常的な作文の力を見る出題をした。どの問題も短大で勉学を行うのに必要な最低限の基礎力が備わっているかを見るために出題したが，今年の学生も昨年同様に非常にできが悪かった。基本的な文法・語法が弱く，中学校レベルでつまずいている学生がかなり多いという現状が明らかになっている。

5．1 月実施の英語力調査および TOEIC テストの結果について

これまで，4 月に実施された英語力調査を基にして，今年度の学生の英語力を分析してきたが，1 月の後期の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施し，どの程度スコアが伸びたかを調査した。第 1 回目（4 月実施）と第 2 回目（1 月実施）のテストの平均点と得点差をまとめたものが表 13 である。

表 13　英語力調査結果比較

第 1 回目	第 2 回目	得点差
約 45.8 点	約 48.1 点	プラス 2.3 点

第 2 回目（1 月）は 44 名が受験し，平均点は 48.1 点で，第 1 回目より 2.3 点上昇した。過去 5 年間の得点差推移を見てみると，20 年度はプラス 1.7 点，21 年度はプラス 4.0 点，22 年度はプラス 3.8 点，23 年度はプラス 4.7 点，24 年度はプラス 5.0 点となっており，今年度のプラス 2.3 点はここ数年の中でかなり低い上げ幅であり，満足できる数字ではないと思う。昨年度は，入学時の学力は低かったけれども 1 年後には 5 点も学力が上昇したが，今年度は，入学時の学力も低く，1 年後にもそれほど伸びていないという結果に終わった。しかし，当然ではあるが，しっかり努力した学生は着実に学力を伸ばしている。4 月の段階では，60 点から 74 点までの中間層上位の層がわずか 3 名しかいなかったが，1 月の試験では 6 名に倍増している。また 4 月に中間層下位にいた学生も数名が 1 月には中間層中位に上昇しており，やる気のあった学生とそうでなかった学生との差がはっきりとした 1 年であった。

また，今年度も，12 月に本学で実施された第 4 回 TOEIC IP テストを受験するように指導し，短大 1 年生 17 名が受験した。全学との比較は表 14 の通りである。

表 14　第 4 回 TOEIC IP テスト結果

学　　部	受験者数	平均点
短　　大	17 名	238.5 点
全学（短大含む）	248 名	329.7 点

短大を含む全学で 248 名が受験し，平均点は 329.7 点であった。短大の平均点は 238.5 点であり，昨年の平均点を 3.2 点上回っている。短大 1 年生の最高点は 345 点，300 点以上の学生は 2 名であった。2 年生については，選択科目のインテンシブ・イングリッシュⅠ・Ⅱを履修した学生が 430 点（最高点）までスコアをアップさせた。

6．おわりに

最後にもう一度，全体の調査結果を振り返り，今後の英語教育の指導について考えてみたい。平成 14 年度からの全体の平均点の推移を見てみると，14 年度：56.9 点，15 年度：54.5 点，16 年度：50.5 点と年々下降の一途をたどり，17 年度に 56.5 点といったん上昇に転じたが，18 年度に 48.3 点と大きく下げ，19 年度：51.0 点，20 年度も 51.0 点と戻したが，21 年度は 46.0 点と下

げ，22 年度は 53.5 点と大きく上昇したが，23 年度は 43.7 点と過去最低になり，昨年度は 44.9 点，今年度は 45.8 点であった。評定平均値の高い学生が多く入学した平成 17 年度と，短大第 2 希望入学者など勉学意欲が高い学生が多く入学した平成 22 年度を除いて，平均点は段階的に年々低下していると見るべきであろう。今回の試験で特徴的だったのは 60 点から 74 点までの中間層の上位の層が激減したことであったが，これは来年度以降に向けての大きな不安材料であろう。この程度の試験で平均点が 45 点前後ということは，ほとんどの学生が中学レベルの基礎力がないということである。とは言え，ある程度基礎力のある学生も数名おり，この二つの集団のバランスをどう取っていくか，どう授業を組み立てていくかが今後問われてくると思う。